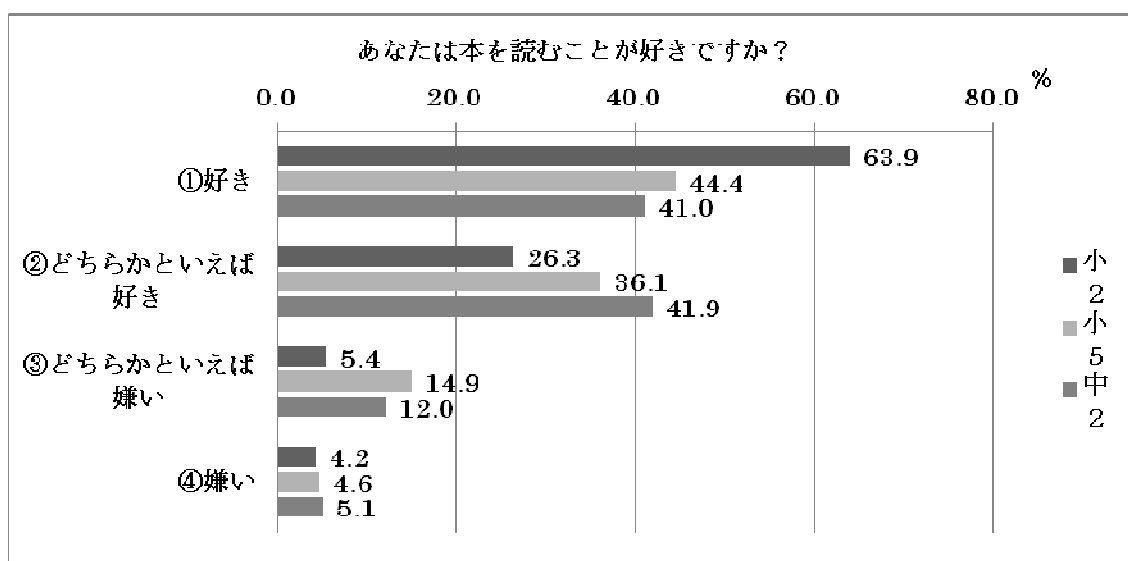


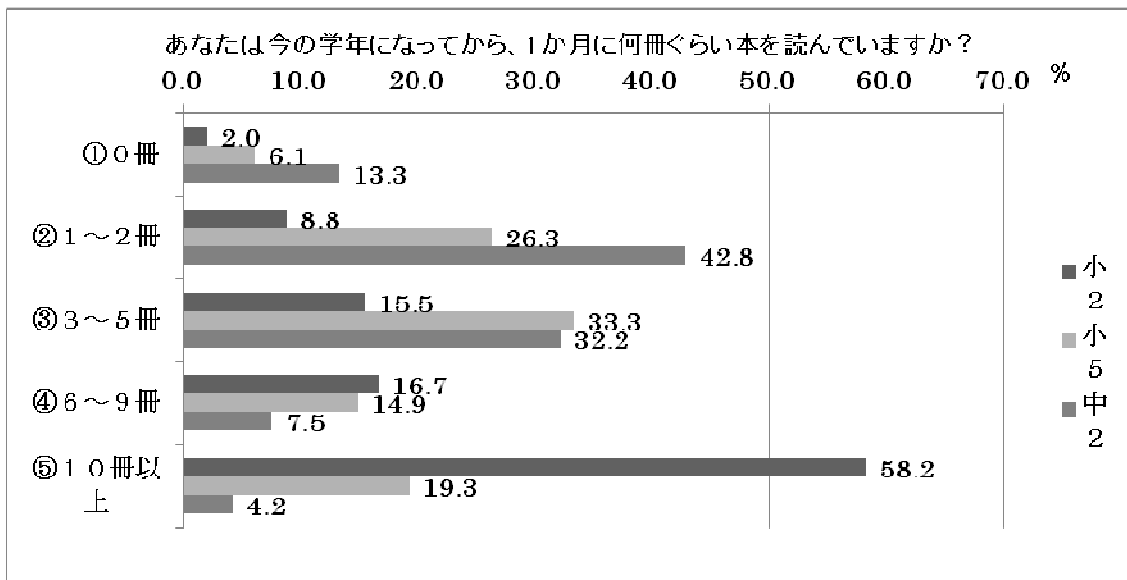
第2節 狭山市における子どもの読書活動をめぐる現状と課題

1 子どもの読書活動の現状

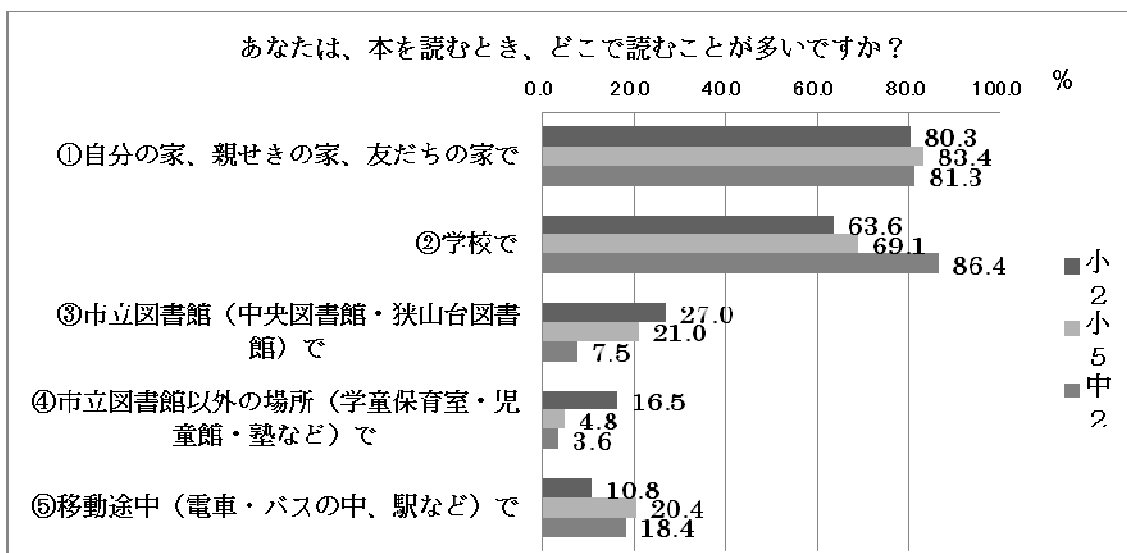
平成23年度に、小学校2年生と5年生の児童及び中学校2年生の生徒並びに小学校5年生の保護者を対象に、各小・中学校ごとに、当該学年1クラスずつを抽出して、アンケート調査を実施しました。



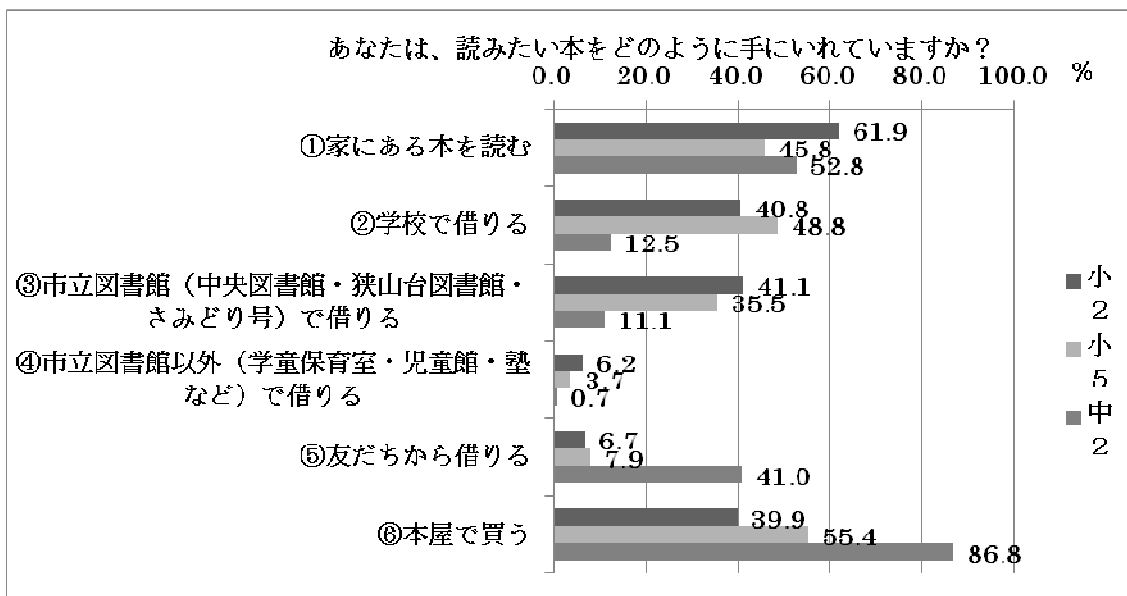
本を読むことが好きかについては、本を読むことを「好き」・「どちらかといえば好き」と答えた児童・生徒の割合は8割から9割程度と高い割合を示し、特に小学校2年生の割合は高くなっています。一方、本を読むことが「嫌い」・「どちらかといえば嫌い」と答えた児童・生徒の割合は、小学校5年生と中学校2年生ではさほどの差はないものの、小学校2年生に比べ高くなっています。



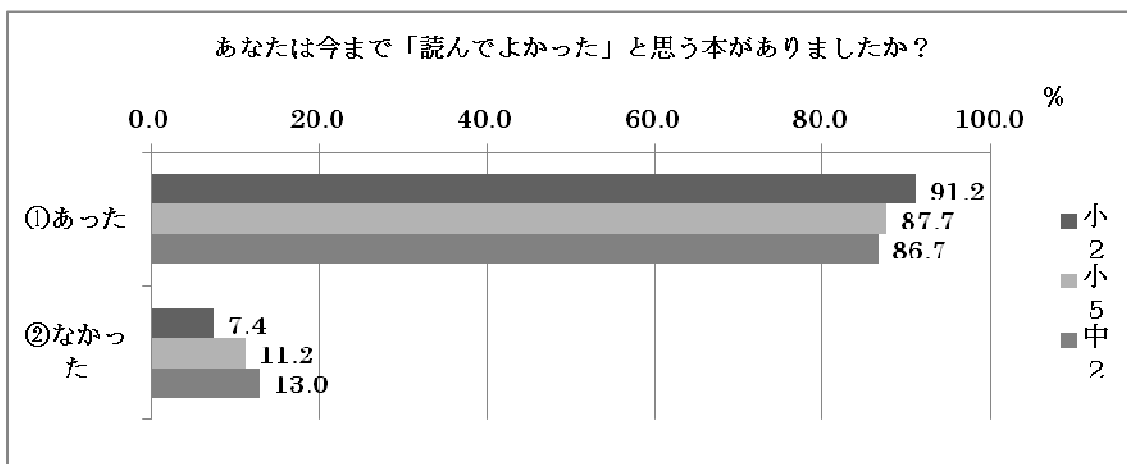
ひと月に本を読む冊数については、3冊以上本を読んでいる児童・生徒の割合は、小学校2年生が90.4%、小学校5年生が67.5%、中学校2年生が43.9%となっており、特に小学校2年生は58.2%の児童が10冊以上読んでいます。これは、年齢が低い子どもの本は比較的短時間で読めることの影響が考えられます。一方で、0冊という回答が、それぞれ2.0%、6.1%、13.3%であり、年齢が上がるにつれ、本を読まなくなる子どもが増えることが伺えます。



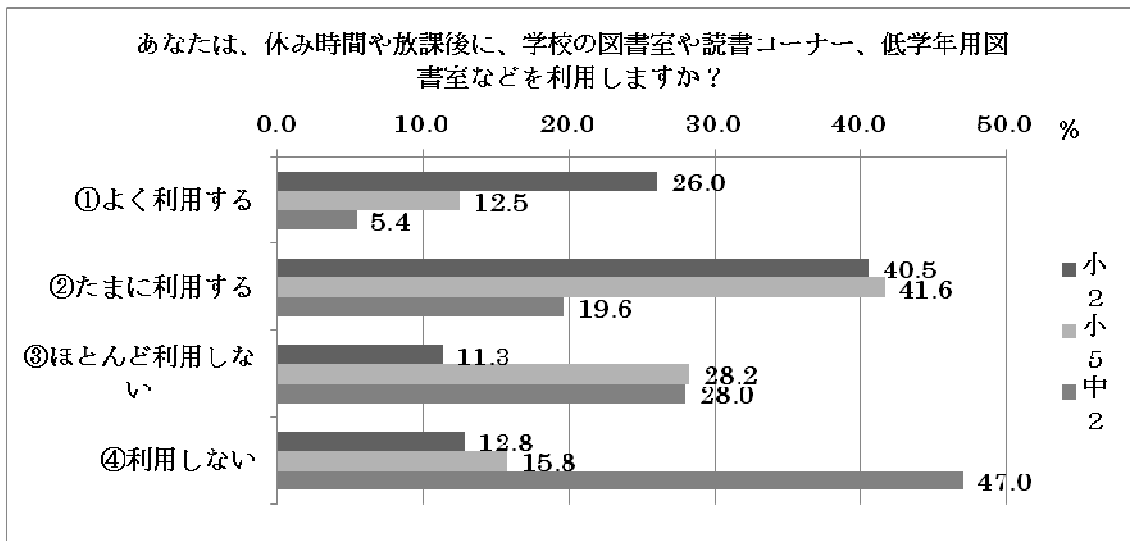
読書を行う場所については、どの学年でも自分の家などや学校が多くなっています。一方で、中学校2年生は、他の学年に比べて市立図書館を利用する割合が特に低くなっています。なお、中学校2年生において学校で本を読む割合が高いのは、朝の読書などの取り組みが影響していると考えられます。



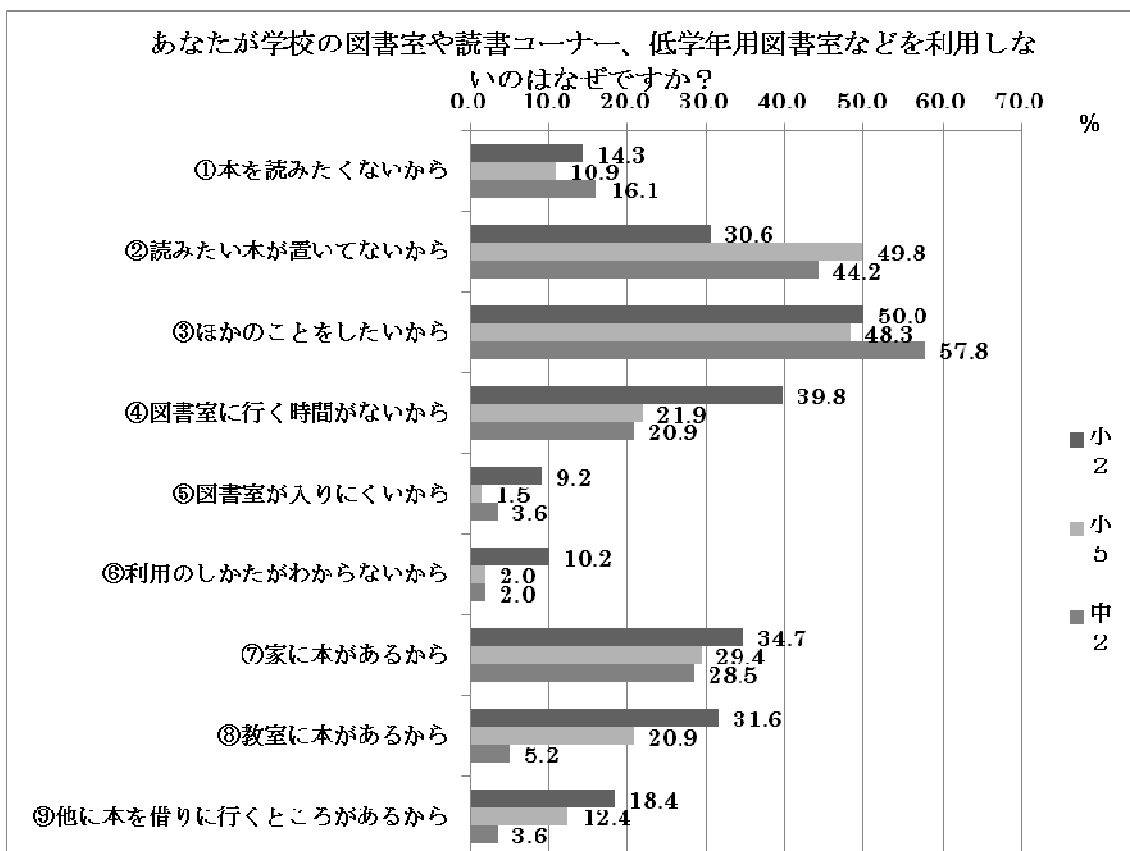
本の入手先については、学校図書館や市立図書館を利用する割合は小学校2年生と5年生では大きな差はありませんが、中学校2年生では低くなっています。一方で、年齢が上がるにつれ、本屋で買う割合が高くなっています。また、中学校2年生では、友人から借りる割合も他の学年に比べて高くなっています。



「読んでよかった」と思う本がある割合は、どの学年でも9割前後と高く、大多数の児童・生徒が「読んでよかった」と思う本と出会った経験があることが伺えます。ただし、学年が高くなるにつれ、「読んでよかった」と思う本がない子どもの割合が高くなる傾向にあります。

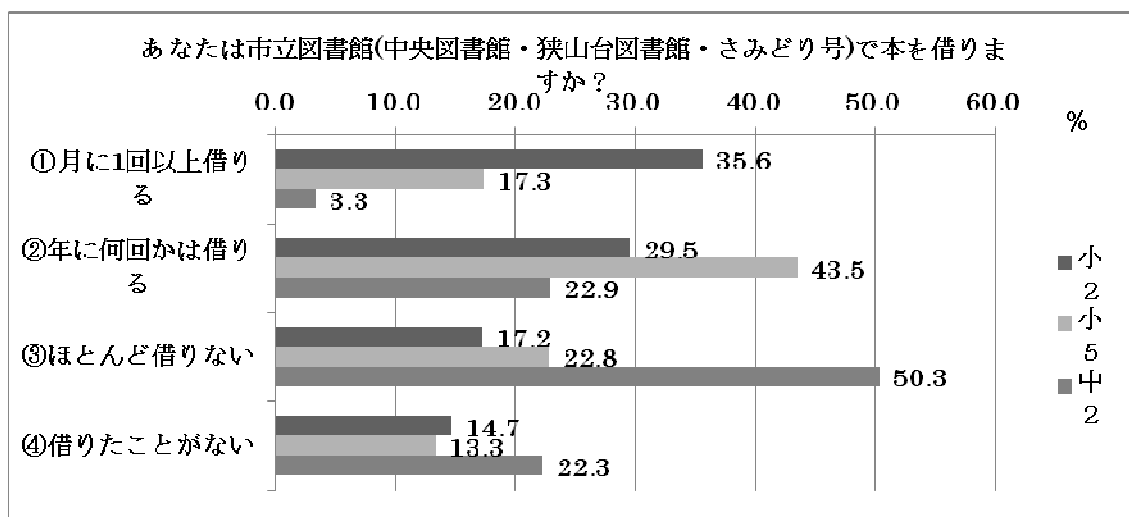


学校の図書室の利用については、学年が高くなるにつれて割合が低くなっています。特に中学校2年生は、「利用しない」の割合が47.0%と高くなっています。

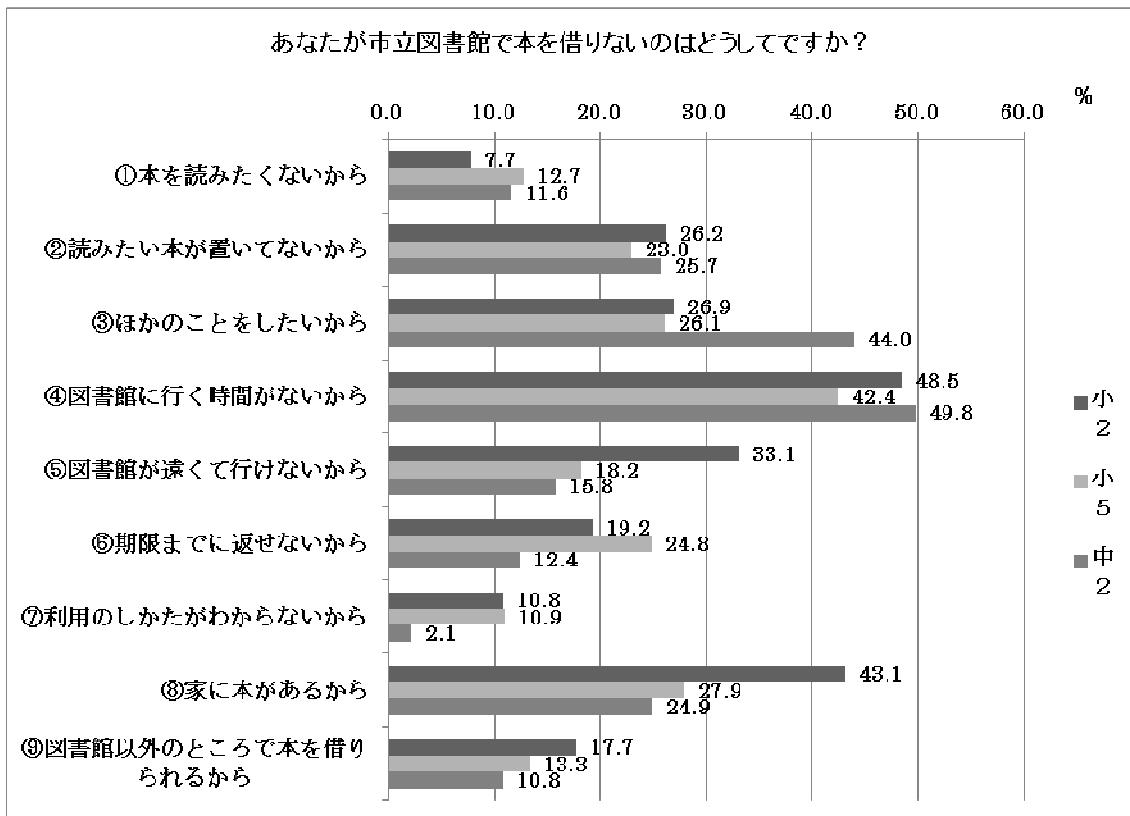


学校の図書室を利用しない理由については、「ほかのことをしたい」、「読みたい本が置いていない」が学年を問わず高い割合となっています。また、「読みた

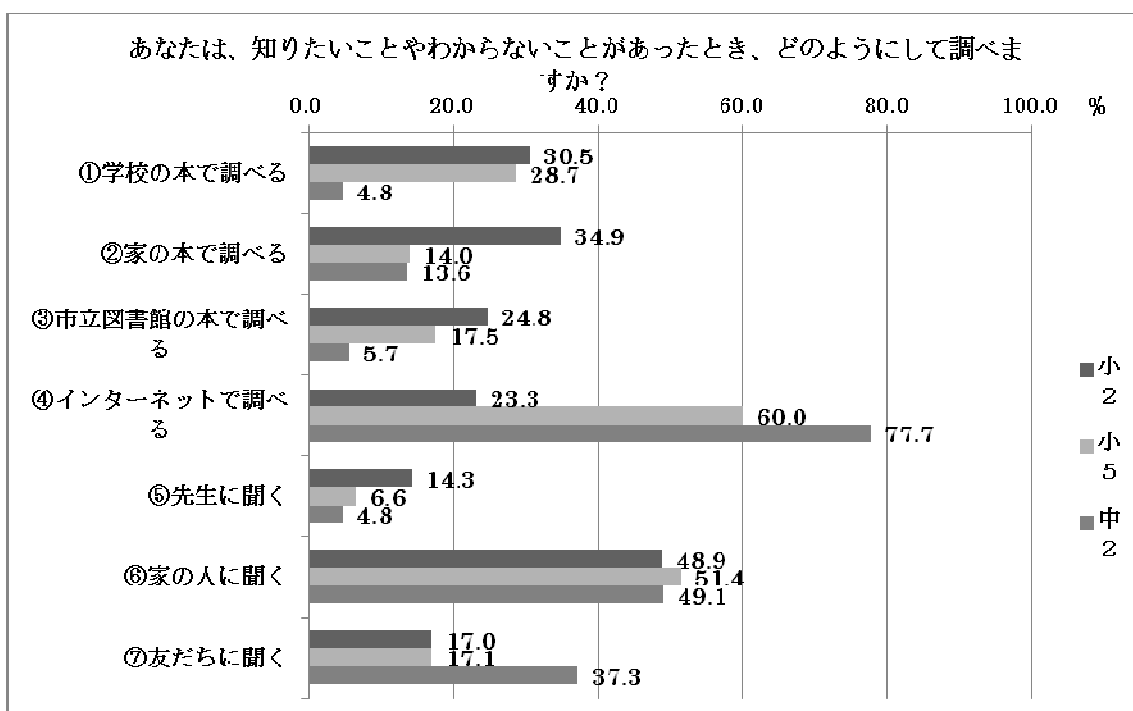
い本が置いていない」の割合が、小学校2年生に比べて小学校5年生と中学校2年生では高くなっています。



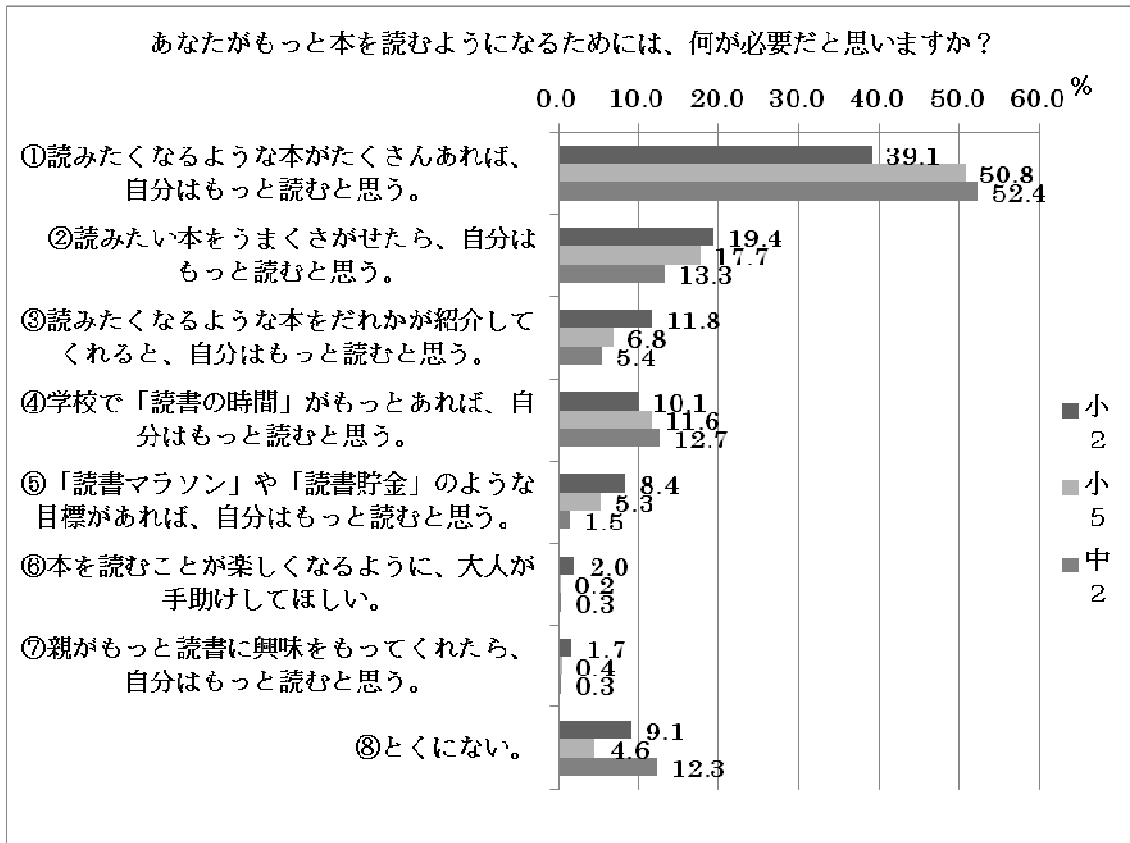
市立図書館の利用については、学年が上がるにつれて利用頻度が下がる傾向にあります。特に中学校2年生では、「ほとんど借りない」、「借りたことがない」の割合を合わせると72.6%になります。



市立図書館で本を借りない理由については、どの学年でも「図書館に行く時間がない」が最も多く、その他、小学校2年生では、「家に本がある」が高い割合を示し、さらに「図書館が遠くて行けない」、「ほかのことをしたい」、「読みたい本が置いていない」が理由としてあげられています。また、小学校5年生では、「家に本がある」、「ほかのことをしたい」、「期限までに返せない」、「読みたい本が置いてない」が理由としてあげられています。さらに中学校2年生では、「ほかのことをしたい」、「読みたい本が置いていない」、「家に本がある」が理由としてあげられています。なお、本を読みたくない割合は、小学校2年生では7.7%で、小学校5年生と中学校2年生は10%強となっています。



知りたいことやわからないことを調べる手段については、どの学年でも「家の人に聞く」が約5割を占めていますが、その他、小学校5年生の約6割が、また、中学校2年生の約8割が「インターネットを利用する」と答えています。一方で、家や学校、市立図書館の「本で調べる」や「先生に聞く」割合は相対的に低く、特に、中学校2年生では、小学生に比べ、学校や市立図書館の本で調べる割合は非常に低くなっています。



自分がもっと本を読むようになるために必要なことについては、どの学年でも、「読みたくなるような本がもっとたくさんあれば」の割合が最も高く、次いで、「読みたい本をうまく探せたら」の割合が高くなっています。本の紹介を望む割合や学校での読書の時間の確保は、どの学年も相対的に低い割合となっています。

【1 か月の子どもの読書量に対する児童の回答と保護者が予想した回答の比較】

区 分	小学校 5 年生の回答 (%)	小学校 5 年生の保護者の回答 (%)
0 冊	6.1	13.2
1～2 冊	26.3	51.9
3～5 冊	33.3	21.2
6～9 冊	14.9	5.5
10 冊以上	19.3	7.2

保護者の 5 割以上が 1 か月の子どもの読書量を 1 から 2 冊と予想していますが、実際には 3 冊以上読んでいる子どもは 6 割を超えており、小学校 5 年生については、保護者が思っている以上に子どもは本を読んでいることが伺えます。

【市立図書館の利用に対する児童の回答と保護者の回答の比較】

区 分	小学校 5 年生の回答 (%)	区 分	小学校 5 年生の保護者の回答 (%)
月に 1 回以上借りる	17.3	よく連れて行く	19.7
年に何回か借りる	43.5	たまに連れて行く	54.1
ほとんど借りない	22.8	ほとんど連れて行かない	13.7
借りたことがない	13.3	連れて行ったことはない	11.0

市立図書館に子どもを連れて行ったことのある保護者は 7 割を超えており、これに符合して、市立図書館で本を借りる子どもの割合も 6 割を超えています。

【子どもがもっと本を読むようになるために必要なことに対する児童の回答と保護者の回答の比較】

区 分	小学校5年生の回答 (%)	小学校5年生の 保護者の回答(%)
読みたくなるような本がたくさんあれば	50.8	13.0
読みたい本をうまくさがせたら	17.7	30.4
だれかが紹介してくれると	6.8	10.5
学校で「読書の時間」がもっとあれば	11.6	11.2
「読書マラソン」や「読書貯金」のような目標があれば	5.3	9.2
本を読むことが楽しくなるような教育	0.2	6.5
親がもっと読書に興味をもてば	0.4	17.0
特にない	4.6	1.2

子どもがもっと本を読むようになるために必要なことについては、保護者の回答は、「読みたい本をうまく探せること」が約30%と最も多く、次いで、「親が読書に興味を持つこと」、「読みたくなるような本がたくさんあること」、「学校で読書の時間がもっとあること」、「だれかが紹介してくれること」の順になっています。一方で、子どもの回答は、「読みたくなるような本がたくさんあること」が最も多く、次いで、「読みたい本をうまく探せること」「学校で読書の時間がもっとあること」の順になっています。

2 子どもの読書活動に関する取り組みの現状

(1) 市立図書館における取り組み

- ①乳幼児がはじめて出会う本として薦めたい本のリスト「としょかんがおすすめする はじめてのえほん」を作成し、館内で配布しています。また、これらの本に目印のシールを貼って、目につきやすい場所に展示しています。
- ②小学生の低学年、中学年、高学年及び中学生から高校生の4つの年齢層ごとに、子ども向け広報紙「よむぞうタイムズ」「よむレンジャー」を作成し、館内で配布するほか、小・中学校を通して全児童・生徒に配布し、本の紹介を行っています。子ども向け広報紙は年3回発行し、これに合わせて紹介した本の展示を行っています。また、毎月テーマを掲げ、幼児や児童向けの絵本の展示や、中学生から高校生向けの本の展示を行っています。
- ③狭山市地域文庫連絡会をはじめとする、子どもと本をつなぐための活動を行っている団体と連携するとともに、活動を支援しています。
- ④ブックスタート関連事業として、保健センターが主催する育児学級のなかで、乳幼児が初めて出会う本として薦めたい本のリスト「としょかんがおすすめする はじめてのえほん」を配布するとともに、読み聞かせの大切さや図書館の利用方法を伝えています。
- ⑤教育センター及び小・中学校と連携し「子どものときに読みたい本 100冊¹⁾」（以下「さやまの100冊」という。）を選定し、その推奨を行っています。
- ⑥教育センターと共催で、学校図書館担当者との情報交換会を実施し、学校図書館との連携・支援を図っています。
- ⑦テーマに沿って様々なジャンルの本を紹介するブックトークや図書館での調べ学習の方法を教える出前講座を、学校に出向いて実施しています。
- ⑧学校図書館の支援として、学校から提示されるテーマに沿った図書館資料の選定と貸出などを行っています。
- ⑨「さやまの100冊パック²⁾」を用意し、小・中学校や学童保育室などへ貸し出しています。

¹ 教育センター、小・中学校及び市立図書館が連携し選定した、子どものときに読みたい本で、小学生の低学年向け、中学年向け、高学年向け及び中学生向けの4つの年齢層に分けてそれぞれ25冊ずつ選定している。

² 小・中学校及び学童保育室への貸し出し用に、「さやまの100冊」を小学校の低学年向け、中学年向け、高学年向け及び中学生向けの4つの年齢層ごとに分けてまとめたもの。

- ⑩子ども及び子どもの読書活動に関わる大人に対して、知りたいことを調べたり、資料を探したりする際の手伝い（以下「レファレンス」という。）を日常的に行っています。
- ⑪子ども向け資料については、子どもに分かりやすいように分類と配置などを工夫するとともに、自分で資料を探することができるように、蔵書検索システムのなかに子ども向けの操作画面を用意しています。
- ⑫子どもが身近なところで本に親しめるように、移動図書館の巡回場所の一部を幼稚園や小学校に置いています。
- ⑬保健センターが主催する「こんにちは赤ちゃん事業」において、生後 2 か月くらいの乳児のいる家庭にリーフレット「えほんのある暮らし」を配布しています。
- ⑭就学前の幼児とその保護者を対象に、職員によるおはなし会「ちびぞうクラブ」などを実施しています。
- ⑮小学生向けに、本の紹介や市立図書館での体験学習を、講座として開催しています。
- ⑯児童・生徒を対象とした図書館訪問学習や職場体験学習及び教員 20 年研修の受け入れを行っています。
- ⑰子ども向け資料の充実に向けて、資料の選定や収集などを計画的に行っています。
- ⑱市立図書館の児童書の蔵書数と貸出数の推移は、次のとおりです。

区分	平成 19 年度	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度
蔵書数	186,287 冊	191,542 冊	196,503 冊	200,027 冊	204,178 冊
貸出数	237,784 冊	243,661 冊	268,746 冊	308,848 冊	312,670 冊

(2) 学校における取り組み

- ①12 学級以上の学校に兼任の司書教諭を置き、また、司書教諭を置いていない学校においては学校図書館担当教諭を置いて、学校図書館の利用の促進を図っています。
- ②市が学校図書館指導員を委嘱するとともに、学校図書館ボランティアの協力を得て、学校図書館資料の整理や案内、掲示物の作成などを行っています。
- ③読書習慣を身に付けるため、多くの学校で朝読書の時間を設けています。
- ④教育センター及び市立図書館と連携し「さやまの 100 冊」を選定し、その推奨を行っています。
- ⑤毎月 23 日を「家庭読書の日」と定め、家庭での読書を通じての親子の交

流を推奨しています。

⑥調べ学習などで、学校図書館や市立図書館の活用の促進を図っています。

⑦学校図書館図書標準の達成を目指して、資料の充実を図っています。

⑧学校図書館の蔵書数は、次のとおりです。

区 分	蔵書数	学校図書館図書標準達成率
小学校(15校)合計	143,741冊	96.7%
中学校(10校)合計	109,750冊	105.5%

※平成23年度小中学校図書館蔵書数調査

(3) 幼稚園、保育所、学童保育室における取り組み

①幼稚園、保育所、学童保育室では、読み聞かせなどを積極的に行っています。

②幼稚園では、読み聞かせの大切さを保護者に伝える講演会や、毎月23日の「家庭読書の日」に関連づけた親子で楽しめる読み聞かせや保護者による読み聞かせを実施しています。

③保育所では、ボランティアによる読み聞かせを実施しているところがあります。また、保護者の一日保育士体験のなかで、読み聞かせを実施しています。

④幼稚園や保育所では、所蔵している本を家庭に貸し出しています。

⑤学童保育室では、市立図書館からの貸出を利用して、子どもが本に親しめる環境を整えるとともに、指導員を対象とした研修会のなかで、子どもと読書に関する内容を盛り込むなどしています。

(4) その他の施設における取り組み

①保健センターでは、市立図書館と連携し、ブックスタート関連事業として、主催する育児学級のなかで、乳幼児が初めて出会う本として薦めたい本のリスト「としょかんがおすすめする はじめてのえほん」を配布するとともに、読み聞かせの大切さや図書館の利用方法を伝えています。

②保健センターでは、生後2か月くらいの乳児のいる家庭に民生児童委員が出向き、子育てに関する情報提供などを行う「こんにちは赤ちゃん事業」において、市立図書館作成のリーフレット「えほんのある暮らし」を配布しています。

③保健センターでは、ミニ文庫を設置して、乳幼児の各種検診の際に利用を勧めています。

④児童館や子育てプレイスでは、図書コーナーを設置するとともに、地域

のボランティアと連携した子どもとその保護者を対象としたお話し会の開催などを行っています。

- ⑤公民館では、子育て支援の一環として、読み聞かせ講座や地域のサークルなどの協力によるおはなし会などを行っています。
- ⑥教育委員会の社会教育課と教育指導課では、学校応援団推進事業の一環として、学校図書館ボランティアへの支援を行っています。
- ⑦教育委員会の社会教育課では、社会教育関係団体への支援を行うなかで、子どもの読書活動の推進に取り組む団体への支援を行っています。

3 子どもの読書活動推進の課題

課題1 子どもが本に親しむ機会の充実

- 子どもの読書活動の現状として、家庭と学校が読書をする主な場であり、保護者が思っている以上に子どもは本を読んでいることが伺えます。このことから、子どもの読書活動のより一層の推進を図るうえでは、家庭と学校での読書活動をさらに進める必要があります。
- 子どもがさらに本を読むようになるために必要なこととして、子ども自身は「読みたくなるような本がたくさんあること」をあげ、保護者は「読みたい本をうまく探せること」をあげています。一方で、市立図書館が小・中学校へ出向いて行うブックトークで紹介した本や、子ども向け広報紙で紹介した本には人気が集中しています。こうしたことから、子どもの読書活動のより一層の推進を図るうえでは、子どもと本をつなぐ機会のより一層の充実を図る必要があります。この場合、特に、高学年になるほど読書離れの傾向が見られることから、こうした点からも機会の充実を図る必要があります。
- 市立図書館や学校図書館をはじめとして、多くの場において、ボランティアなどにより、子どもと本をつなぐ活動が行われています。子どもが本に親しむ機会の充実を図るうえでは、こうしたボランティアなどの活動のより一層の促進とスキルアップを図る必要があります。

課題2 市立図書館と学校図書館の充実

- 市立図書館の利用は、学年が上がるにつれて利用頻度が下がる傾向にあり、また、市立図書館で本を借りない理由として、「読みたい本が置いてないこと」が理由として多くあげられています。その背景として、市立図書館に対する子どもの関心が高くないことがうかがえることから、そのためには、子どもに対する広報のより一層の充実を図る必要があります。
- 市立図書館では、子どもの成長を後押しする資料や、学校図書館を支援する資料をさらに充実する必要があります。また、収集した資料を子どもが利用しやすいように、分類や配置を工夫する必要があります。
- 市立図書館では、子どもと本をつなぐ活動を行っているボランティアや団体と積極的に連携し、協力を得て、様々な取り組みを行い、子どもに読書の楽しみや喜びを実感させていく必要があります。
- 学校図書館は、児童・生徒にとって本に親しむことのできる身近な場所でありながら、利用していない割合が、小学校5年生で44%、中学校2年生で75%

にのぼっており、また、利用しない理由としては、「読みたい本が置いていないこと」が多くあげられています。児童・生徒の学校図書館の利用の促進を図るうえでは、資料の充実はもちろんのこと、児童・生徒が利用しやすく、利用したいと思うような環境を整備する必要があり、特に、人的な体制については、専任の職員を配置するなどして、体制の充実を図る必要があります。

課題3 子どもの読書活動推進の機運の高揚

- 子どもの読書活動の推進に向けて、これまでも「子ども読書の日」及び「子どもの読書週間」の時期をとらえて関連する取り組みを実施するとともに、本市として、独自に、毎月23日を「家庭読書の日」と定め、これに関連する取り組みを実施していますが、今後も、取り組みの主体の拡大を図るなどして、子どもの読書活動についての啓発をより一層推進していく必要があります。
- 小学校5年生や中学校2年生では、知りたいことや分からないことがあったときの調べ方として、「インターネットで調べる」が最も多くあげられています。一方で、本を読むようになるために必要なこととして、「読みたいような本がたくさんあること」が最も多くあげられています。こうしたなかでは、本の紹介も含めて、読書の楽しさや喜びをより一層啓発して、子どもたちの読書離れをなくしていく必要があります。